

宗教教育に就て

三 枝 樹 正 道

(一)

近來宗教々育と云ふ言葉が一種の流行となつて、苟も教育に従事するものにして、或は宗教家にして此言葉を口にせないものは時代を解せない固陋であるかの如く思はれる様な状態となつて來た。然しこれと同様に宗教々育の事實も亦盛になつて來たとは自分には思へない。一體何事でもそうであるが言葉等はその意味が極めて不明瞭にして漠然たる時には、従つてその概念内容が廣大な爲に誰にでも自分に都合のよい意味を、その内容として手盛りすることの出來ると云ふ場合には、その言葉は非常に流行し易いものである。今此宗教々育なる言葉も宗教家教育家爲政者等と、その立場の異なるに従つて各自に都合のよい解釋を施してゐるのではないかと疑ふ。若しこれに一定の明瞭なる定義でも下したならば恐らく今日程の流行を見ないことであらう。然しそれはとにかく此言葉の流行だけでも宗教々育促進の助成作用には少からざる効力があることはまだせめてもの喜ばしいことである。

偕て現今日曜教園、日曜學校、子供會等と隨分盛に諸所に兒童教化、所謂宗教々育の運動が行はれて

ゐるが、それを以て現在宗教々育盛なりとは斷言出来ない。それは恰も寺院教會の數多きを以て、その土地に宗教盛なりとは斷言し得ないと同様である。凡そ宗教にしる教育にしる制度や設備の完全不完全とは必ずしも正比例するものではなく、場合によつては反つてかゝる物の影に潜んで寧ろ反比例を呈することさへもあるのである。これは抑も何を物語るのであるか。吾人の考へねばならぬ點は茲にある。眞の宗教は壯大なる寺院にあるのであらうか、眞の教育は立派な校舎にあるのであらうか。否寧ろ、それら以外の何物かである、即ちその本質的價値は生ける人にあるのである。故に若し人を得ざれば、いかにその數が多くとも、いかにその設備が完全であつても結局、何の效果もない。釋尊も基督もベスタロッチーも決して完全なる制度や設備を持つてはゐられなかつた。勿論人を得て尙ほその上に、完全なる設備の多數を得ればそれは至幸の極である。ジツメルは優れし教育者によつて用ひらるゝ拙き方法は拙き教師によつて採らるゝ勝れたる方法より勝ること幾倍かも知れないと云ふ意味の言葉を云つてゐる眞に宜なりと思ふ。

(二)

偕て教育とは色々の意味が含まれておらうが、まづ一言にして云へばナトルプの云ふ如く衝動的本能的人間、即ち「あるもの」を、理性的人間即ち「あるべきもの」にまで育成することである。更に詳しく云へば知情意の混沌として未成熟な兒童を知情意の發達進歩せる人間に成熟せしむべく、これを誘導

することである。換言すれば個人を通じて、智を磨き思索を練磨することによつて科學を發達せしめ眞價の發現に盡し、情を陶冶し、感情を純化することによつて藝術を進歩せしめ美價値を表現し、又意志を訓練し志操を強固にして善良なる個人たらしめ道德を向上せしむることによつて善價値を顯現する所に教育の意義は存するのである。かくて人は教育さるゝことによつて、その本具の天性を現し茲に美はしき文化は創造され傳播されるのである。これ即ちベスタロツチの云ふ兒童中心の内性開發である。

更にシュプランガーの意見に従へば教育とは文化生活に於て無我の愛即ち教育愛を以て、人の全的價値感受及價値形成能力を、現に成長しつゝある人々の上に、その内部より發展させる爲に未成熟者の精神にまで及ぶ成熟者の能動的意志作用を云ふのである。従つて教育には能力の陶冶が中心となり、而もそれには體驗及理解に訴へたる價値によるべきことを主張してゐる。又教育愛の重要なを認めて教育者は單なる消極的な傍觀者であつたり、或は進んで積極的に出づるとするもそれが、何だか一種の威力を有せる監視者の如きものであつてはならぬと説く。即ち教育者は慈母の如く、無我愛を以て所謂大慈大悲を持つて兒童に接すべきである。而して吾人の特に注意すべきは全的價値感受即ち精神の全體に、全生活の上に常に價値への關心を説ける點にして、是れ吾人の教育には宗教的精神の必然的に須要にして充滿せねばならぬと云はんとする所である。

かくの如く教育は未成熟者をして、未だ發達せざる價値形成能力を充分發展向上せしめん爲に成熟者

の參與する文化傳播の作用である。而もその價值形成は全體的價值完成を基礎とも最高最終の目標とせねばならぬ、於之吾人は理想價值として、價值完成者、佛陀覺者を求むるのである。是れ教育其者より眺めて、その根底に、その理想に宗教を要望する必然性を認むる所以である。

(三)

顧みて吾人の精神を考察せんに、その指導的地位にあるものは意志である。即ち要求である。而して苟も人間たる以上如何なる人間にも存在し、凡て精神作用、身體行動の中心原動力となれるものは、永遠ならんとする希願向上せんとする熱望である。是れ即ち無量壽たり、無量光佛たる佛ならんとする内心の叫びにして宗教心である。此要求は知に現れては大智となり不斷の研究となり、情に顯れては大悲となり、絶對の同情となり、又意に現れては大願大行となりて奮闘奉公の生活となる。

かく論じ來る時には宗教心は、吾人人間の心奥深く内在せる要求にして、是れあるが故に科學の發達も道徳の向上も、藝術の進歩も現れるものなることを知る。あらゆる文化は實に宗教心の發露の結晶である。云ふべきである。從來限られたる一宗一派にのみ宗教を結合して考へられし長き因襲は、吾人のかくの如き意味に於て説く宗教を、いかにも物足りなく、更に進んでは殆んど宗教として無價值のものゝ如く感せしめる傾向がある。勿論吾人は宗教の表現としての形式、信仰の姿としての儀式を否定するものではないが、それが宗教の本質とは考へ得られない。宗教の本質はデイルタイやジンメルの説く生

命の如く、常に流れゆく生ける力でなければならぬ。流るゝものはその跡に自ら一つの型を残す、然しそれは流るゝものにとつて本質的のものではない。此意味に於て文化教育學者の説く生活型の如く宗教にも色々の形式を認めることは出来るであらう（此例證は勿論適切なものではないが）執はれること即ち執着は宗教の極力排斥する所である。吾人の心が或一時の安逸を貪り、一所に停滯することは宗教の最も排斥する所である。曠劫の昧執は稍ともすると偷安を喜び胎墮を希ふ心を起す、然もその背後より常に何物かの叱咤を受ける、是れ即ち宗教心の閃きにして佛性の力である。

かくの如く吾人人間として見る時に必ず内心に宗教心の存在するを知る。然らばかゝる宗教心を具有せる人間を教育するに若し宗教を無視して、これを行へば、いかにしてその効を擧げうる事が出来るか。是れ恰も生ける人間を生命なき物體として取扱ふと等しく實に人間冒瀆である。故に茲に於ても亦宗教々育の必然性を感ずるものである。

(四)

以上大體宗教々育に就て教育及吾人の精神の兩方面から私見を略述せしが要するに教育は價値發現に於て未熟なる兒童を成熟せる人間にまで育成することにして、而も兒童本來、價値に對して全的向上を要望するもの即ち宗教心の根本的動因に依りて進展するものとせば、教育は宗教を離れては存せざるものなることを知る。換言せば教育とは佛性の開發にして自覺、覺他、覺行窮滿の佛を理想として、教師

と生徒との精神的解發作用により兒童を誘導助成する作用を云ふ。只宗教と異なる點は宗教は佛性を全體
 的渾一的に而も直接的に取扱ふに對して教育はこれを部分的に間接的に取扱ふ點にありと云ひ得るか
 と思ふ。

かくて宗教々育は、宗教家の養成でもなければ宗教を教へることもない（こんなことは恐らく不可
 能である）又一宗一派の信徒を作る爲でもなく要は宗教的信念に生きたる彈力ある暖みある人格の養成で
 ある。

偕て然らば次に問題となれるは、宗教々育方法論である。これは極めて困難な問題にして、自分の研
 究は未だこれを發表しうるまでに充分進んでゐない。故に茲には、只、それには所と、時と、人と教材
 との研究の必要なることを一言して單なる所感を披瀝するに止めよと思ふ。

所としては必ずしも寺院教會を選ぶ必要はない。寧ろ自然性を多分に所有する兒童の素直なる發達を
 助けるには天然自然の萬物美はしく發育せる自然を選ぶことも一法と思ふ。然し又莊嚴な殿堂の内に自
 づと一種の靈感に打たる、如きは更に有効な事と信するが現在の寺院教會の内部の構造は多くは天真の
 兒童の精神を或は傷ける點無きにも非るかと思ふ。

次に時である。これは勿論身心發達の旺盛な少青年期に行ふが特に必要である。これに就ては何れ近
 き中に發表したいと思ふ。

次に教材に就ては現在種々劃策され、或は經典内の説話を或は高僧傳を或は傳道の歴史等と考へられ
てゐるが、どの程度まで兒童の精神發達、興味等に適應せしめて編纂すべきが大なる問題である。是非
とも盛に研究さるべき重大なる事項の一つである。

最後に人であるが、曾てもジンメルを介紹した如く、これは最も大切な問題である。以上の三項
がいかに完全するとも此人を得ざれば結局全部が無駄事である。燃燒してゐない炭は他に火を移しな
い。燃燒すべき性質を有し乍らも、火種の無い所では熱も出ない。熱を出すには火種を必要とする、而
も小さき火よりも、大なる火の方が効果は早い、教育も各の如きものである。教育愛に燃わ切つてゐる
人にして始めて、兒童を教育しうる。地上にのみ關心を持つ兒童に月の存在を知らしめんには月を示す
指が必要である。無知の處に於ては案内者を必要とする。而も案内者は親切であると同時に充分に萬事
知つて居らぬばならぬ。今教育者も一方兒童に對しては熱烈なる教育愛を必要とすると同時に他方教育
者自身不斷に價値への憧憬と活動をなせることが必要である。換言せば、宗教心の旺盛なる所謂上求菩
提下化衆生の念、切なるものを必要とするのである。即ち自ら完全を求め佛陀を念願するが故に常に自
己の謙虛を持し敬虔の情に満ち、且自己の完成を期する所に努力の意、顯れ不斷の研究となり、その結
果は正しき判断を爲すことを得、而して全體の完成を希念する情は絶對の同情となりて未熟者に對する
無我愛となる、かゝる人にして始めて、眞の宗教々育者たりうるのである。宗教家、教育家は正にかく
あるべき筈であるが吾人は自ら反みて實に汗顔の至りである。